南河内第二中学校区

【目指す子ども像】

〈まなび〉主体的に考え、学び合いを通して互いに高め合える子ども
〈こころ〉思いやりの心をもち、自他を大切にできる子ども
〈からだ〉心身の健康に関心をもち、たくましく実践できる子ども
〈ちいき〉社会に貢献し、地域に主体的に参画しようとする子ども

【実践研究課題】

〔理数教育〕
理数教育の充実と推進を通して、思考力や表現力の向上を図り、自ら課題をもち、共に学び合い、深い学びに向かう子どもを育成します。
重点教科（算数・数学、理科）

各部会の取組

＜授業研究チーム　算数・数学部会＞

【児童生徒の実態】

二中学校区は、学習に対する興味関心が高い生徒が多い。また、算数・数学科においては基礎的・基本的な知識や計算技能を高い水準で身に付けている児童・生徒も大変多い。一方で、計算して答えを求めることができているが、理由や根拠を明確にして説明することを苦手としている生徒がいる。また、各種調査の結果から、説明を問う問題では、説明の途中で諦めてしまう、または無解答の児童・生徒が一定数見られる。個人の差が大きいため、基礎基本の確実な定着が課題である。

【部会のねらい】

算数および数学的活動を通して、自ら課題をもち児童・生徒の学び合いを活性化させる。また、事象を数理的に考察し、根拠を明らかにして筋道立てた説明を行うことで、算数・数学的な思考力および表現力を育成するとともに、基礎基本の確実な定着を目指す。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	①昨年度の取組を踏まえ、児童・生徒の算数・数学的な思考力および表現力を育成するため、算数・数学的な活動を適宜実施する。 ②中学校教員による、小学校への乗り入れ授業の実施（緑小・祇園小）を通して、学びをつなぐ。（本年度中止） ③授業見学を実施し（本年度中止）、教師の発問の工夫や授業展開をもとに指導法を検討し学び合う。（実践事例持ち寄り）
成果	・昨年度の取り組みを踏まえ、児童・生徒の算数・数学的な思考力および表現力を育成するため、算数・数学的な活動（特に、用語を意識し、解法を説明する活動）を適宜実施した。ノート等にまとめることで、発表の際に用語を使って正しく発表できる生徒が増えた。（効果的であった指導：算数言葉のノート作り、思考ツールの活用、説明に使いたい言葉の活用） ・単元で一回程度という無理のない範囲での実践ができた。 ・児童・生徒が意見を発表する際に、「どうして？」と投げかけることにより、より児童・生徒が考え,核心に迫ることができた。
課題	・小学校（低・中）・・・「算数言葉」は，とても有効であるが，型にはめすぎると，混乱することがある。どこまで児童に求めるか指導者がよく考えておく必要がある。困難な場合は、適宜、図に戻ると効果的であった。算数言葉をノートにまとめる活動では，ノートを書かせる時間に課題があった。単位授業の中では書かせることは厳しいことが多い。 ・小学校（高）、中学校・・・数学用語を用いて説明しようとする姿は多く見られるようになった一方で、用語を正しく用いて説明できない場面があった。根拠になる部分なので、表やグラフ、図、まとめ方など工夫することで正しく定着させることが課題である。 ・実践を今回だけで終わらせず、継続的にしていくことが大切である。また、他の部会の先生方にどう広め、授業に活用していくかが課題である。

＜授業研究チーム　理科部会＞

【児童生徒の実態】

知的好奇心が高く、理科の授業にとても意欲的に取り組む。また、学習塾に通う児童生徒の割合も高いため、知識が豊富である。しかし、知識が先行し、実験・観察における器具の操作などの習得を軽く考えている傾向があり、基本的な技能が身に付いていない児童・生徒も多い。また、実験の結果や原理などの知識がわかっていればよいという考えの児童生徒も多いので、自然事象について深く考えたり、生活体験や既習事項を結びつけて考えたりするなどの根拠を示して考えを書くことが苦手な傾向がある。

【部会のねらい】

安全に実験・観察を行うための基本的な知識の習得を目指すとともに、「科学的な見方・考え方」を使って自然事象について深く考えたり、生活体験や既習事項を結びつけて考えたりする授業を展開する。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	・ICTの積極的な活用を図り、指導に有効な動画を活用したり、演示実験の効果的な見せ方を工夫したりする。 ・課題やテストを工夫しながら、児童生徒に自然事象に対する正しい知識を身に付けさせる。
成果	・ICTを活用し、手元をモニターで映しながら演示実験を行うなど、子どもたちにわかりやすく見せる工夫を行うことができた。代表生徒の演示実験では、グループ実験で流れてしまう細かな操作についても、モニターを見ながら間違いを指摘できるので、技能面での経験値は少ないながらも、知識として高まる部分も見られた。また、単元テストの前の確認テストや、ミニテストを行うことで、知識の定着を図ることができた。
課題	・確認テストやミニテストを行うことで知識の定着を図ってきたが、できなかった実験の内容については、知識の定着が弱いことがわかった。今後は、実験・観察など、子どもたちの操作が必要な学習は、できる限り工夫して実践できるよう、お互いに情報を交換していきたい。また、次年度は、日産財団で理科大賞をとった祇園小の取組、特に、「書き方の型」について3校で共有し、実践していきたい。

＜学級づくりチーム＞

【児童生徒の実態】
　知的好奇心が高く、学習意欲が高い。学習・生活両面が安定している児童生徒が多いが個別指導が必要な児童生徒も少数おり、学習に限らず学級経営にも工夫が必要である。興味のあることに主体的に取り組むが、集団に対しては関心がやや薄い傾向もみられ、グループや学級といった集団で協同的に課題解決に向かう意識がやや低い。

【部会のねらい】
　「学び合う仲間としての学級を常に支え合って目標にチャレンジし、友達との豊かな対話を創造して、規律を守り安心できる環境のもとで協調的な関係を創り出す力」を育てるために、以下のことを進める。
①「学級力向上」の研修　②各学校・学級における「学級力向上」の実践と分析・手だての検討

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	①全学級で学級力アンケートを実施し、レーダーチャートを基に学級で話し合う。 ②「学級力向上プログラム」について研修を行う。 ③担任から見た、学級での話合いの様子や児童生徒の変化・課題等を話し合う。 ④今年度の研修内容を評価し、次年度の内容を検討する。
成果	①年間2回の学級力アンケートを実施し話し合うことで、「自分たちの力で自分たちのクラスをよりよくしよう」という意識を保ち過ごすことができた。 ②「学級力アンケート」の質問文について、解釈と表現の変更を行ったことでより実態に近い評価を得ることができ、クラスをよりよくする方策もイメージしやすくなった。 ③各校での取組や児童生徒の変化・課題について話し合ったことで、自校の取組の改善に役立てることができた。 〇道徳の時間に心を育て、学活の時間に人間関係を育む指導をいつも以上に意識した。 〇年間3回の家庭学習強調週間を実施し、児童生徒の家庭学習の習慣化が図れた。強調週間に限らず継続できるようになったり、内容の工夫・多様化が見られるようになったりしている。
課題	△家庭学習…各家庭の状況・事情があり、取組についても意識の差があって、学校で介入できない部分がある。個人差もあるので、個に応じて指導していく必要がある。 △学級力…（中学校）どのクラスでも「規律力」が課題。

＜道徳教育チーム＞

【児童生徒の実態】
　本学区の児童生徒の保護者には他県出身者が多く、将来的には県外への移動の可能性が高い家庭も多い。そのため、地域の伝統や文化への関心が高くない傾向が見られる。児童生徒も学校での活動以外に、地域の伝統や文化に触れる機会は少なく、郷土への関心や愛着はあまり高くはないという実態が見られる。

【部会のねらい】
　郷土への理解を深め、ふるさとを愛する心を育てる教育活動推進のための取り組みを考え、実践していく。

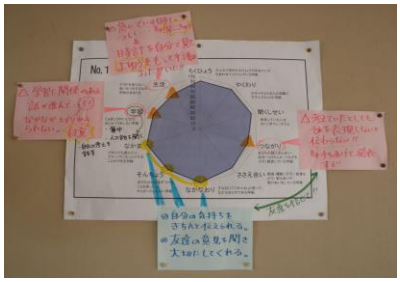
視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	①重点内容項目を意識した授業実践＜B＞＜C＞ ②道徳の別葉への重点内容項目の明記と確認＜A＞ ③各校ごとに児童・保護者・地域への啓発に努める＜D＞
成果	・昨年度設定した、二中学区における重点内容項目「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」を踏まえた授業実践を全クラスで行うことができた。また、郷土コーナーの設置や給食時の地産地消献立の紹介、二中学区クリーン活動などの際の児童への意識付けなどで、下野市をもっとよく知りたい、素敵な町にしたいという気持ちを高めることができた。
課題	・重点内容項目に関する授業実践を引き続き行うことが大切である。また、その場限りではなく、どのように他教科と横断的に、他学年と縦断的に展開していくのかをカリキュラムマネジメントシートの検討を通して話し合っていく必要がある。さらに、授業に活用できる地域教材や人材の開発・収集を行っていくことも必要である。

〈算数科　研究授業の様子〉

〈理科　研究授業の様子〉

〈学級力アンケートのレーダーチャート〉



＜心身健康チーム＞

【児童生徒の実態】
・自主的に運動に励む児童生徒と、そうでない児童生徒の差があり、体育の授業では容易にけがをしてしまう児童生徒がみられる。
・立腰指導の効果は現れてきたが、「良い姿勢」を継続できる児童生徒はまだ少ない。
・朝食を毎日食べる児童生徒は86%と、比較的朝食を食べてきている。しかし朝食の内容に関して課題のある児童生徒がみられる。また、食べてこない理由には、生活リズムのみだれによる児童生徒が多い。
・保護者の健康や食への関心は全体的に高い。

【部会のねらい】
・体育での安全指導や体の使い方について、小中の発達段階に応じた指導をおこなう。・朝食摂取の充実と体作りの意識の向上を図る。

視点	＜A＞ 教育課程の 工夫改善	＜B＞ 教育活動の 連続性の確保	＜C＞ 教職員間の 連続・協働	＜D＞ 家庭・地域との 連携・協力

取組	①体育時の準備体操の仕方や、けがが多い単元での予防のための工夫についてまとめる。 ②朝ごはん毎日食べよう週間の実施、朝食アンケートで実態把握、朝食欠食児童生徒への個別指導 ③立腰指導の継続、各校の学校保健給食委員会への参加 ④「二中学区健康だより」の発行 ⑤11月を「体力向上月間」とし、保健だよりや給食だより、給食献立等で啓発を図る。
成果	○課題を「体力向上」に焦点化し、11月に「体力向上月間」を設け、小中共通の実施計画を使用することで、小学校と中学校の取組が共有できた。また、体育部・保健体育部、養護教諭部、栄養職員部各部がリンクし、体力向上に向けた取組を実践できた。 ・体育部⇒日にちや曜日ごとに学年やクラスを分けて、持久走、鉄棒、縄跳びなどの実施 ・養護教諭部⇒姿勢（立腰）指導、イスの座り方でのけが防止 ・栄養職員部：「体力向上メニュー」の提供、「朝ご飯毎日食べよう週間」 ○立腰指導の継続により、「立腰」の声かけをすると、正しい姿勢を取ることができる児童生徒が増えた。また、けがにつながる椅子の座り方に気を付けるようになった。
課題	○新型コロナウイルス感染症拡大防止により、各校への学校保健給食委員会の参加が出来なかった。また、話し合いの回数も減ったため、準備体操の仕方やけがの予防の工夫をまとめることができなかった（次年度へ）。 ○食事は家庭での生活習慣に大きく関わってくる。家庭への啓発や個別指導を継続していく必要がある。

〈二中学校区健康だより〉

〈投力向上のための練習〉

〈食事中の姿勢指導の様子〉